

ダメット意味理論再考

—実践的能力としての言語理解を考える—

三上温湯

Abstract

This paper deals with Michael Dummett's theory of meaning. The theory is known as a theory of understanding, that is, the aim of the theory is to give an account of 'what it is that someone knows the language'. He requires to specify what we are taking as constituting a manifestation of understanding of the language, but this requirement has been taken to be impossible demand by many researchers. However, it is not clear what he consider as the understanding. In this paper we conclude that the understanding consist of a series of practices, which he calls the manifestations of our understandings. From this point of view, we suggest two approaches to specifying the the manifestations of our understandings.

1 研究テーマ

ダメットの意味の理論とは何か

M・ダメットが、「意味の理論 (theory of meaning)」と呼ばれる独自の哲学的理論のプログラムを提唱したことはよく知られている。この彼のプログラムは、一方で、あまりにも理想主義的であるとか、ラディカルすぎるといった批判を受けてきたし、また現在に至るまで、文字通りのプログラムにとどまり続けており、ほとんど具体的な実現に至っていないという弱点を抱えてもいる。だがそれにもかかわらず、このプログラムはきわめて多くの現代哲学者たちの関心を刺戟し、彼らの考えに重大な影響を及ぼしてきたと言ってよいだろう。では、ダメットの考えるこの意味の理論とはどのようなものであり、さらにそもそも、彼がこのような理論を構築しようとした目的はどこにあったのだろうか。一見意外であるが、こうした疑問を検討してみるとじきに気づかれるのは、まさにダメットの考えの独自の根底性ゆえに、本来あまりにも基本的であるはずのこれらの疑問に答えることが、実は決して簡単ではないということである。例えば、意味の理論とはどのような理論であろうか。次項で一度、一般に、意味の理論がどのように探求されるものであるかに目を向け、ダメットの意味理論の特質をどのように捉えるべきか、考察することとしよう。

2 研究の背景・先行研究

意味の理論のアイデア自体は、もちろんダメットに固有のものではなく、とりわけ近年では一つの共有概念となっており、現代の代表的な哲学事典 (Stanford

Encyclopedia of Philosophy) ではこの語が独立した項目として立てられ、二つに細分化されて説明されている (<https://plato.stanford.edu/entries/meaning/>)。すなわち、意味の理論とは、(1) 第一には、ある言語の各表現について、それがどのような事柄を意味するか (表現するか) を特定しようとする、言語学的・形式意味論的な部門 (「意味論的理論 semantic theory」と呼ばれる) であり、(2) 第二には、一般にある行為主体がある言語に習熟しそれを実践的に使用しうるのはいかにしてかを究明する、認知科学的・コミュニケーション論的な部門 (「基礎づけの意味論 foundational theory of meaning」) である。こうした意味の理論の試みがある中で、ダメットの考えはどこに位置づけられるであろうか。

(1) の意味論的理論が行うことは、より詳しく言えば、およそ次のようなものだと考えられる。すなわち、ある言語 L にどのような表現タイプ (文結合子、固有名、普通名詞、等々) がどのような結合可能性を伴って用意されているかを明らかにし、各表現タイプについて、その意味と見なしうる存在者のタイプは何であるかを特定した上で、各語に対し、まさにその意味 (いわゆる「意味論的値 semantic value」) であるものとして、対応するタイプ中の一定の存在者を割り当てる、ということである。こう述べてみれば明らかであるように、ここでの意味論的理論とは、基本的には、フレーゲ (言うまでもなく、ダメットの意味理論の考えに最も大きな影響を与えたのはフレーゲである) に端を発する「Bedeutung (意味、指示) の理論」そのもの、あるいはその現代的な展開形態であり¹、したがってそれが、ダメットの考える意味の理論と重なるものであること、より適切には、ダメットが自らの意味の理論の一部を成すべきだとしていたものに他ならないことがわかる。だが同時に、これもダメット自身が強調した通り、こうした「Bedeutung の理論」は、彼の意味の理論にとっては「単なる一部」にすぎず、もっとはっきり言えば、彼の意味の理論にとって不可欠ではあっても、最も枢要な部分なのではない。² では、そうした最も枢要な部門とはどのようなものだろうか。それはまさに、(2) の基礎づけ的な意味理論なのだろうか。おそらくある程度までそう言ってよいと思われる。というのも、ダメットにとって意味の理論とは第一義的には、ある言語の習熟話者が持つ理解内容を明らかにする理論、もっと踏み込んで言えば、ある人がこの理論を習得し、理解していることが、直ちにその人を当該言語の習熟話者とさせるような、そうした理論だからである。実際彼は、What is a Theory of Meaning(I) において以下のように強調している。

意味の理論は、理解の理論である。すなわち、意味の理論が説明を与えねばならないものは、ある人がある言語を知っているとき、つ

まりその人が、当該言語の諸表現や諸文の意味を知っているときに、知っていることとは何か、ということである。[WTM1, p.3]

しかし、ここで言われている「意味の理解」とは、より精確にはどのようなことだろうか。再び(2)の基礎づけの意味理論の考えに戻ってみよう。基礎づけの意味理論が行おうとするのは、基本的には、文字通り、認知科学的色彩の強い企て、すなわち、ある言語の習熟話者が、当該言語について標準的に保持している認知的内容—習熟話者が当該言語について標準的に知っている（あるいは少なくとも、信じている）事柄、すなわち例えば、そうした話者が記憶しているある語の定義（別の語による言い換え）、あるいはさらに、ある語に結びつけているイメージ、プロトタイプといったもの等—を明らかにすることであり、あるいはまたコミュニケーション理論的な企て、すなわち、習熟話者が言語を共有する他者との間で相互理解を果たすためにどのような技量を駆使するか、といった事柄を明らかにすることである（あるいは少なくとも、それ主要な部分として含む）と考えられる。では、ダメットの意味の理論もまたこうしたものだろうか。

3 筆者の主張

実践的能力としての概念と、その習得の説明という課題

確かに、ある程度まではその通りである。実際ダメットは、フレーゲから、先に(1)との関係で述べた「Bedeutung の理論」のみならず、「Sinn（意義）の理論」を受け継いでおり、その際ダメットは、フレーゲにおける Sinn が、まさに認知的なものであることを再三強調している。だがそれにもかかわらず、ダメットの意味の理論を(2)の基礎づけの意味理論と一般的に同一視してしまうことは、決定的に不十分だと考えられる。なぜなら、ダメットが問題にする「習熟話者が獲得している意味理解」とは、話者の心的領域に蓄えられた言語についての信念や知識自体でも、あるいはまた、言語を介して他者の意思を察知したり自己の意思を告知したりできるコミュニケーション・スキル自体なのでもなく、何よりもまず、当の語を適切に使用・適用し、そのことを通じて一定の行為（そこに含まれる目的）を達成することのできる実践能力そのものだからである。例えば、「ならば」という接続詞（文結合子）の意味の理解とはどのようなことだろうか。それはダメットによれば、何か辞書的な定義を提示できるとか、「p ならば q」の真理表（古典論理であろうとなかろうと）を書いて見せることができるといったことではない（それらを含んでもよいが、本質ではない）。そうではなく、ある話者が「ならば」の意味を理解しているとは、一般にその話者が、仮定 p からの帰結 q の導出が確

立済みとなっている状況下に置かれたとき、そこからさらに仮定 p を撤回して「p ならば q」を結論することができる（「ならば」の除去則）という、そうした実践（この場合は推論実践）を行う能力（ability）を持つこと、そのような態勢（disposition）を身につけていること、に他ならない³。

「徹底した意味理論」という考えのポイント

こうした実践的能力・態勢としての意味理解ということをおそらく(2)の基礎づけの意味理論もまた、ある程度まで探究主題としていよう。だが、ダメットの意味の理論においては、こうした実践的能力・態勢としての意味理解そのものの記述・分析が中心的関心事であるため、一貫して次のような課題が重要な考察主題となる。その課題とは、一般に、ある語の意味を理解し、その語の適用能力を身につけた話者は、そのことによってまさに何を実践しようようになるのか、言い換えれば、当該の意味理解（より一般的に言えば、そうした意味理解を介して達成される概念把握）により、いまや当該話者にとってどのような〈実践的可能性の空間〉が開かれるに至っているのかを特定する、という課題である。(2)の基礎づけの意味理論にとっては、こうした課題は、その本来の射程を超え出る過大な要求となるだろう。まさにこの点で、それはダメットの意味理論と大きく異なると言えると思われる。

さて、いま述べた課題、意味理解がどのような実践的可能性の空間を切り開くかを特定するという課題に取り組む意味理論とは、ダメット自身の用語で言えば、（単なる「つましい意味理論」と対比される）「徹底した意味理論」に他ならないと言えよう。と言うのも、徹底した意味論とは、一般に人のいかなる振る舞い（行為）が、ある語についてのその人の意味理解の表出、顕現（manifestation）として認められてよいかを定めようとするものであり、これは言い換えれば、まさに当該の意味理解（を介した概念把握）が、それを達成した者に対して何を可能とさせるかを特定することだと考えられるからである⁴。実際ダメットは、意味の理論が明らかにすべき内容を以下のように述べている。

我々が、何らかの実践能力を、命題的知識の形で表現することに関心がある場合、そしてとりわけ、その実践能力がまさに言語を習得しているということである場合、以下のことが我々に義務としてのしかかってくる。すなわち、もし我々の提起する考えが、説明力を持つものであるならば、[1] その人が、当の能力を持つために、知らなければならぬこと [内容] が何であるかを特定するだけでなく、 [2] そうした知識を持つということどのようなことであるのか、すなわち、われわれがどのようなことを、そうした命題たち

についての知識の顕現を構成しているとみなしているのか、ということをも特定せねばならないのである。もしこのことをし損なったら、その理論的表現と、その理論が表現しようとするところの実践的能力とを結びつけることができないだろう。⁵ [WTM1, p.21]

冒頭でも触れたように、従来、このように意味理解の顕現化を特定せねばならないというダメットの徹底した意味理論の要求は過大なものであり、実現不能なものと思われてきた。⁶ 実際、ダメットが実践能力ということで、具体的にはどのようなことを念頭に置いていたのかということも不明瞭であり、その眼目が十分明らかでない不可解なものとして扱われてきたように思われる。だが、ここまで述べてきたように、ダメットの意味理論が、言語習得を介して開かれた行為の可能性を特定することにあると理解するならば、意味理解の顕現化を特定することは、決して何か特殊で実現不能な要求ではなく、当然明らかにされるべき、ダメットの意味の理論の中核を成すものだと見るべきであることが理解されるのではないだろうか。

4 今後の展望

彼の理論をより適切に具体化するにあたってさしあたり取り組むべき問題は以下の二点であると考えられる。すなわち [1] 一般にある語に関する理解や知識の規準として、一体どれほどの言語使用を行えることが要求されるかという問題と、[2] 主体が行う振る舞い（言語使用）や、主体が持つそうした振る舞いの能力・傾向性を、そこで問題となっている語の意味理解の顕現化だと認めてよいのはどのような場合か、という問題である。

[理解のエビデンスの過度に厳格な規準をリベラル化するための論理の探究]

第一の問題について、ダメットがとっている立場は、非常に、あるいは過度に厳格なものであるように思える。この厳格さは、ダメットが、対象言語の分析に際して採用されるべき論理が、そしてその理解内容を記述するためのメタ言語（そこで採用される論理）も、一般的な意味の理論（真理条件意味論）で用いられる古典論理ではなく、ブラウワー以来の直観主義者たちが開発した直観主義論理であるべきだと主張している

7

ということに起因していると考えられる。ところで、この直観主義論理を採用する理由とは、(i) 第一に、我々人間的主体が持ちうる言語理解（それを介した世界についての知識と信念）は、本来的に局所的・未規定的・生成的なものでしかありえず、大局的・状況超越的な二値原理・排中律に立脚する古典論理によっては決して適切に記述しえないからであり、(ii) 第二に、他方でひ

とたび我々が適切に確立した理解や知識は、古典論理が許容するような決定不能性や非構成性を決して含んではならず、徹頭徹尾構成的な正当化によって裏づけを与えうる純正なものであるはずだからである。だがこの考えのうち、(i)については多くの哲学者が賛成するが、(ii)はある種の極端な認識づけ主義としておそらく疑問視されることが多い考えであり、実際、ここでは詳論の余裕がないが、ある人がある語の意味理解を持つと言えるための規準は、ダメットの考えに従うと厳格になりすぎてしまうという事実を指摘することができる。実は、情報の哲学の近年の展開が明らかにしつつある点の一つとして、確かに直観主義論理は古典論理的な大局性・超越性を拒否しはするが、その本質は、まさに(ii)のような認識論的基礎づけ主義の理想を具現することにあると見なすのが適当であり、他方で、(i)のような人間主体の活動の局所性・未規定性・生成といったものを適切に扱うための論理は、それとは異なる多様な情報論理の諸体系のうちに見出されるものだというのである。⁸このような状況を踏まえ、情報論理の諸体系、特に幾何学的論理の技術的改良と哲学的基礎の解明に努め、適正な仕方であり得る理解規準を提案することが、現代において、ダメットの意味理論の着想の啓発性を明らかにし、さらなる具体化を図る有効な試みになると考えられるのである。

〔理解の顕現化についての懐疑論を退けるための、行為の合理化の構造の再分析－reason論の展開〕

第二の問題は、言い換えれば、ある主体がある振る舞いをし、あるいは振る舞いの能力を有しているとき、その振る舞いや能力が、まさに問題となっている語の意味（概念）の理解を具現していると我々が結論してよいのはどのような場合か、という問題である。この問題が困難であるのは、一つには、すでに触れたウィトゲンシュタインの規則遵守のパラドクスなどにおけるように、その振る舞いや能力に基づいて自然にある語の意味理解を帰属してよいように思える主体が、実はその後の振る舞いによってそうした理解を持っていなかったことが露見する、といった懐疑論的問題があるからでもあるが（この点の精確な解明も、この研究の目的の一部としたい）、より重要で興味深いと考えられるのは、この問題がもっと一般的な合意の合理化（rationalization of action）にまつわる困難を示唆していると考えられるからである。行為の合理化とは、やはりデイヴィドソンが指摘した、我々が日常的に互いの間で行う重要な営みであり、すなわち、ある主体がある振る舞いをを行った際に、その振る舞いの理由（reason）を特定すること、より詳しく言えば、そこでの目的および手段—デイヴィドソンにより忠実に言えば、（目的に対する）賛成的態度と、（目的実現のための手段に関する）信念のペアという、いわゆる

「主たる理由」—を帰属する、という営みに他ならない。この行為の合理化につきまとう一つの難問は、賛成的態度と信念の組み合わせが適切でさえあれば（つまり、当の信念に従う限り、確かにその行為が当の目的の実現手段だと見なしうる限り）、例えばその目的がどれほど荒唐無稽なものであっても合理化が行えてしまう、ということである。こうした困難を避けるためには、行為の合理化においては、行為が目的実現の手段となっている（と主体が信じている）だけでは不適切であり、ダメツト的な観点から言えば、更に進んで、主体が当該の目的や手段に関する適切な概念理解を備えていることを前提せねばならないはずである。この意味で、行為の合理化においても概念理解の顕現化の問題は重要であり、まさにその前提となるものであるが、では顕現化を認めるための規準をどう詳細に与えるべきかは、ダメツトによってほとんど論じられていない。

われわれが言語について理解している内容を、そしてその意味理解の顕現化とはどのようなものであるかを明らかにしようとするダメツトの意味理論は、以上のような問題をその射程に含んでいる。これらの問題に対し、一定の見通しを与えることが、ダメツト的な意味の理論の、とりわけその徹底した意味理論としてのあり方を具体的に実現する方策となっていると考えられる。

本稿では、ダメツトのいう意味の理解とはいかなることであるかという問題に力点を置きながら、実は彼の意味の理論が言語習得、とりわけ、意味理解を通じた概念の獲得という極めて一般的な重要性を持つ哲学的問題に取り組むものであり、しかもその際、概念の獲得がそれを果たした行為主体にとってどのような実践的可能性の空間を切り開くかを明らかにしようとする点で、確かにダメツト自身によっては十分に展開されなかったとはいえ依然としてそこには更なる発展をもたらすべく我々が努力する価値が大きく認められることを見てきた。今後こうした問題をさらに続けて検討したい。

注

¹ フレーゲにどれほどまでに意味論値の概念があったかは議論の余地あるところであるが、少なくともダメツトの解釈によれば、フレーゲの *Bedeutung* は現代における意味論値の概念の萌芽であることがわかる [OAP, p.53]

² ダメツトは意味理論の構築の際、フレーゲの指示、意義、力の概念を採用しており、度々、指示の理論だけでは不十分であることを述べている。[WTM2, p.40, pp.84ff][OAP, pp.15ff]

³ ここで詳論できないが、実際のところダメツトは、検証という概念に依

拠して結合子の意味の説明を行う。ここで取り扱った例は、論理定項の意味をその導入則で定める検証主義的な意味論における標準的な結合子の説明に習った。ここではとりわけ、「ならば」の意味が、ダメットの言う意味理解ということ捉える上で重要であると考え、例としてあげたが、ダメット自身は'or' などについて、検証主義的な意味の説明を与えている。こうした見方は [WTM2, p.40-41][1990] その他多くの箇所でも述べられており、とりわけ [LBM] では、検証主義的な意味論の基盤について総括的な説明がなされている。

⁴ 徹底した意味論とは、一般的には、主体にいかなる言語知識も前提とせず、その主体がその理論を学べば、当の言語の習熟話者になることができるような理論であるが、ここでは、こうした理論の構築は、まさに言語習得を介して可能になる行為の特定を行うことで果たされると考えている。徹底した意味論とはどのようなものと捉えられるべきか、ここでは詳論できないが、議論の余地あるところである。この要求についての批判や、徹底した意味論についてのこれとは異なる解釈が多く存在するのでここではそのいくつかを挙げておく。[Mcdowell1987][Mcdowell1997],[Gaifman1996][金子 2006]

⁵ 本文中の番号、[] 内の語は筆者による補足である。

⁶ 代表的なものは注 5 で挙げたものである。

⁷ 本稿では、直観主義論理の、局所性や、未確定性が、言語理解の本質的特性であるという側面を中心に据えて解釈したが、査読者からは、検証超越的な真理概念は本来的に理解不可能なものであるという、いわゆる意味論的反実在論から、直観主義論理の採用が動機づけられるべきだという指摘を受けた。本稿の考えと、この指摘が必ずしも対立するとは思わないが、ダメット自身の議論の流れも踏まえ、今後詳細な検討を行いたい。

⁸ 中でも、最も重要なのは、圏論の中心分野の一つであるトポス論で開発されてきた、いわゆる「幾何学的論理」であると考えられる。この点はさらなる調査と議論が必要であるが、近年の、トポス論における傾向性概念等に関わる成果 [Vickers1993]、計算機科学における様相概念の再検討 [Pfenning and Davies 2000] がこうした議論の裏付けになると考えられる。

文献

[FPL] Dummett, M (1973). "Frege: *Philosophy of language*" first published in 1973, second edition 1981: Duckworth

[TOE] Dummett, M (1978). "Truth and Other Enigmas": Harvard University Press. (藤田晋吾訳『真理という謎』: 勁草書房 1986年)

- [LBM] Dummett, M. (1991). *"The Logical Basis of Metaphysics"*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- [SOL] Dummett, M. (1993). *"The Seas of Language"*: Duckworth
- [OAP] Dummett, M. (1993). *"Origins of Analytical Philosophy"*: Harvard University Press. (野本和幸ほか訳『分析哲学の起源』: 勁草書房 1998年)
- [1973] Dummett, M. (1973). 'The Philosophical Basis of Intuitionistic Logic' *"Truth and Other Enigmas"*
- [WTM1] Dummett, M. (1974). 'What is a theory of meaning?(I)', Samuel Guttenplan ed. *Mind and Language*: Oxford University press. reprinted in Dummett 1993a, 1-33
- [WTM2] Dummett, M. (1976). 'What is a theory of meaning?(II)', Gareth Evans and John McDowell ed. *Truth and Meaning*: Oxford University press. reprinted in Dummett 1993a, 34-93
- [1978] Dummett, M. (1978). 'What do I Know when I Know a Language', Stockholm University. reprinted in Dummett 1993a, 94-105
- [1990] Dummett, M. (1990) 'Language and Truth'. reprinted in Dummett 1993a, p.117-146
- [Frege1884] Frege, G. (1884) 'Die Grundlagen der Arithmetik' (野本和幸訳、「算術の基礎」, 野本和幸・土屋俊編『フレーゲ著作集2』所収: 勁草書房 2001年)
- [Frege1892] Frege, G. (1892) 'Über Sinn und Bedeutung' (土屋俊訳、「意義と意味について」, 黒田亘・野本和幸編『フレーゲ著作集4』所収: 勁草書房 1999年)
- [Davidson1967] Davidson, D. (1967) "Truth and Meaning". Reprinted in his *Inquiries into Truth and Interpretation*, 2nd. ed. (2001), 1742. Oxford: Oxford University Press.
- [Mcdowell1987] McDowell, J. (1987) "In Defence of Modesty". Reprinted in his *Meaning, Knowledge, and Reality*, 87107. Cambridge, Mass.: Harvard University Press (1998)
- [Mcdowell1997] McDowell, J. (1997). "Another Plea for Modesty". Reprinted in his *Meaning, Knowledge, and Reality*, 108131. Cambridge, Mass.: Harvard University Press (1998).

- [Vickers1993] Steven Vickers(1993)'Geometric Logic in Computer Science'.
- [Gaifman1996] Gaifman.H(1996). 'Is 'Bottom-Up' Approach from the Theory of Meaning to Metaphysics Possible?'. Journal of Philosophy 93(8), 373407.
- [Pfenning and Davies 2000] Frank Pfenning and Rowan Davies (2000)'A judgemental reconstruction of modal logic'
- [金子 2006] 金子洋之 (2006)[『ダメットにたどりつくまで』: 勁草書房
(首都大学東京大学院)]